

- 【1. 日本側拠点機関名】愛知県公立大学法人 愛知県立芸術大学
- 【2. 日本側協力機関名】豊田市和紙のふるさと
- 【3. 研究課題名】現代に生きる“手漉き紙と芸術表現”の研究～サマルカンド紙の復興を中心に～
- 【4. 研究分野】芸術関連分野。紙と芸術表現の研究を中心とする。



【5. 実施期間】平成 29 年 4 月～令和 3 年 3 月 4 年間（1 年延長）

【6. 交流相手国との中核的な国際研究交流拠点形成】ウズベキスタン：(1)ウズベキスタン芸術大学：National Institute of Fine Art and Design named after Kamoliddin Bekhzod、(2)サマルカンド大学：Samarkand State University、(3)ウズベキスタン国際イスラムアカデミー：The International Islamic Academy of Uzbekistan、(4)ウズベキスタン科学アカデミー：Uzbekistan Academy of Science

中国：(1)大連民族大学：Dalian Nationalities University

【7. 次世代の中核を担う若手研究者の育成】

3 年間の研究期間を通して、研究メンバーとして若手研究者を積極的に登用し、研究実施において多くの経験を得ることができる機会を作った。日本側の主な研究メンバーとして、本学博士前期後期課程在籍者 2 名や博士取得後の文化財保存修復研究所の研究員 1 名など、次代の研究を担う人材を積極的に登用した。3 年目以降は本研究に関連する自らの研究分野を開拓し、研究成果の発表活動や外部資金の獲得など積極的に取り組み成果をあげている。



また、令和元年 11 月の日本開催セミナーにおけるウズベキスタン、中国の主要な招聘者は、派遣元機関に若手研究者の登用を促すよう説得の結果、45 歳代以下の研究者が 12 名中 7 名となり、日本での講演登壇及び逐次通訳など国際セミナーの経験を与えることができた。さらにセミナー運営、エクスカージョンなど、21 名の大学院学生が協力し運営を行った。

【8. 研究の背景・目的等】

世界には、様々な紙文化がある。“紙”は、人類の根源的な文化形成における重要なメディアとして発展と交流、多様化を繰り返してきた。しかし、古くから伝わる“手漉き紙”文化は世界的に衰退傾向にあり、それらは大量生産時代の経済性や生活そのものの近代化など、需要の変化によるものと考えられている。



ウズベキスタンのサマルカンド紙は8世紀後半、中国から西方のサマルカンドに紙の技術が伝播し出現した紙といわれている。この紙は、硬筆によるカリグラフィー（書）やミニアチュール（細密画）の支持体として発展した美しい紙であり、その製紙技術はさらに進化し西洋にも伝播した。また、ウズベキスタンの紙文化は、サマルカンドの他、コーカンド、ブハラにも存在したといわれているが、19世紀には工房の衰退により技術が断絶してしまい、現在製法や歴史は明らかではない。一方、中国や日本など東アジアの製紙技術は、靱皮植物による原料の探求や、紙の規格化、滲み止め加工の探求、さらにその上に描かれる芸術表現とともに発展してきたが、現在は衰退の一途をたどっており製法の歴史の実態は明らかではない。

本研究では、アジアの紙とサマルカンド紙の解明を中心に、日本側のリーダーシップとウズベキスタン、中国、韓国との協働により、芸術系大学中心の国際共同研究として理論と実践による研究を展開した。紙の復元

や文化史研究、保存修復など“手漉き紙と芸術表現”を通じ、新しい芸術活動への応用など現代において再定義し、各国の独自性と多様性の表出による地域文化の醸成を目指すことを目的とした。

#### 【9. 成果・今後の抱負等】

本研究の成果は、サマルカンド紙の解明における研究として従来の伝説による推論から、10世紀以前に伝播した時代のサマルカンド紙の実態解明の糸口を掴んだことである。原料や製法について、これまで桑でつくられた紙という定説があったが、日本側による、年代が特定できるサマルカンド紙の繊維分析調査により、布を由来とする麻や綿が主原料であることが明らかになった。また古い製法に見られる麻や綿など布を由来とした原料によるサマルカンド紙の試作実験を行い、当時の紙の制作について様々な検証を行った。



これらの研究の集大成として令和元年11月16日、国際セミナー「紙と芸術表現“ウズベキスタンのサマルカンド紙、イスラーム写本、ミニアチュールを知る”」を名古屋にて開催した。これまで2017年度にはウズベキスタン・タシケントのウズベキスタン芸術大学で、2018年度には中国・大連の大連民族大学でセミナーを行い、3度目の国際セミナーとして、2017年から取り組んできた本研究事業の最終報告として開催した。



内容は、ウズベキスタンのサマルカンド紙、イスラーム写本、ミニアチュールに関する調査報告を中心に、和紙、中国紙、韓紙、さらに西洋の紙の歴史をあらためて調査し、世界の紙の伝播地図を再創することを視野に研究を行うプロジェクトの報告を行った。セミナーは、3部構成であり、第1部は、ウズベキスタンと日本、中国、韓国の芸術大学の連携を中心に、この拠点形成事業全体の報告、第2部は、ウズベキスタンのサマルカンド紙、イスラーム写本、ミニアチュールを日本において紹介することを目的に、ウズベキスタンの研究者8名を招聘し講演を実施、第3部は招待講演（本経費外）として、ロシア国立エルミタージュ美術館のアダムフ・アデル氏による「ティームルのミニアチュール」、ミコライチェック・エレナ氏による、「エルミタージュ美術館作品の紙の調査」についての講演を実施した。

また本研究の成果は、平成30年10月より実施している国際共同研究加速基金「世界の紙の伝播とサマルカンド紙の解明に関する調査研究」の採択に繋がっている。この研究では、本事業で収集した携帯顕微鏡などで撮影する簡易マクロ画像などの量的調査と、人工知能によるディープラーニングを活用した質的に充実した調査を関連付け、紙の類似性、同一性を高確率で判別できる方法論を導き出した。初期の研究成果は、ウズベキスタン文化庁副大臣 Kamola B. Akilova の推薦により、ユネスコの国際会議“UNESCO INTERNATIONAL CONFERENCE Samarkand city, August 26, 2019”に招聘され、サマルカンド紙調査研究及び紙繊維組成分析として発表を行った。また愛知県立芸術大学において、令和3年度二国間交流事業オープンパートナーシップ共同研究に採択され、ウズベキスタンとの芸術分野における新たな研究継続も予定している。

現在、3年間の研究活動において、多くの課題やプロジェクトが立ち上がっている。まずは前述の国際共同研究加速基金による研究継続があり、サマルカンド紙研究の成果を基軸に世界の紙の伝播の解明にアプローチする予定である。さらにウズベキスタンでの国際交流展や、ウズベキスタンのミニアチュールを日本で紹介する図録を作成するプロジェクトなどがスタートしており、これらも日本側研究拠点が果たすべき重要な活動であると考えている。今後も“紙と芸術表現”の研究を通じ、芸術系大学の特徴を生かした理論と実践の一体的な研究アプローチを重視し、芸術・文化に関連する学術研究や様々な課題に取り組みたいと考えている。